元気な仲間に支えられて婦人部活動まっしぐら！
－引き継いだ婦人部活動をより活性化させるために－

邑久町漁協婦人部
部長　野崎敏子

１．地域と漁業の概況

邑久町は千町平野を中心とした穀倉地帯で、東西に細長い町である。温暖で雨の少ない気候を生かして、水稲や野菜、そして養殖かきを中心とした農漁業地帯である。

私たちの邑久町漁協は正組合員が１４３名、そのうち女性の組合員が１名いる。組合員の経営は、かき養殖が９２％、漁船漁業が８％の割合となっており、かき養殖は県内一の生産量を誇っている。かきの質は大変良く、虫明湾から昇る朝日にたとえられて「曙（あけぼの）かき」と親しまれていたが、現在は「岡山かき」と名称も統一されている。

２．研究グループの組織と運営

私たち邑久町漁協婦人部の結成は昭和４３年と、今年で活動３２年目を迎え、現在の部員数は１０４名である。部員数の減少をくい止めることと、若い世代の参加を図ることを目的に、親子での参加を呼びかけたところ、５組の親子が参加してくれている。５地区から１１名の地区役員を出して、その中から部長１名、副部長２名、会計１名を選出して、組織の運営にあたっている。

婦人部結成のいきさつについて、邑久町でかき養殖が取り組まれ始めたのが、昭和３０年代のことである。夜明け前からかき揚げに行き、薄暗いうちからかきをむき始め、少しでも多くの収入を得るために眠る時間を惜しんで、厳しい作業を続けていた。そのような生活の中で、気管の不調を訴える人が出てくるようになった。かきの付着物である「ほや」が原因で、喘息を起こしていることが分かり、このままではみんなの健康が危ないと「まず、健康づくり！」を大きなテーマに掲げ、婦人部が結成された。

３．活動課題選定の動機

平成６年、私は婦人部長という大役を任された。部長１年目は部員の方々の理解と協力をお願いして、今までの事業を何とか引き継がなくてはという気持ちで一杯であった。今思い返せば、家族と部員の協力がなければ到底出来なかったと、感謝している。

婦人部にとって継続的な活動の必要性を感じていた私は、部員の前向きで元気な姿勢を大切にし、活動をさらに充実したものにしようと、活動の方法や内容について部員の意見を聞きながら進めていくことにした。

４．実践活動の状況及び成果

（１）「かき打ち従事者健康診断」、「健康づくり大会」の継続

昭和４９年から町の健康診断に加え、漁協の補助をいただいて血液検査項目を加えた独

自の「かき打ち従事者健康診断」を年一回、６月に定期的に実施するようになって、漁業者の健康管理に対する意識が高くなった。かき打ち作業場に換気扇をつけたり、野菜の摂取量を増やすよう食生活の改善を図ったり、通院による病気の早期治療につなげたりと、健康診断の効果は大きかったと思う。

しかし最近、健康診断の受診率が平成３年の６５％を最高に、平成６年には６３．３％、それから少しづつ低下気味にあることを心配した私たちは、婦人部で独自にアンケートを作成し、事前に健康診断に対する意識調査をかき生産漁家に実施したところ、１５３名から回答が得られた。その結果、５０～７０歳代の８３％の人が受診した経験を持つのに対し、３０～４０歳代の人の受診経験者は１７％と、若い世代ほど検診に対する関心が低いことがわかった。次に、受診しない理由については、６４％の人が「病院で定期的に検診を受けている」、１３％の人が「治療を受けている」と答えた反面、「健康に自信があって受けたことがない」人は７％、「一度も検診を受けない」人が９％という結果がでた。

一方、日頃から健康に留意していることを尋ねたところ、各年代を通じて「バランスの好い食事」、「十分な睡眠」、「適量の酒」を心がけている人が多かった。また、検診に対する意見では、高齢の方から、「身近な場所で検診が受けられ、しかも漁協という馴染みの場所であることが特に良い」、中年の方からは「健康に自信のある人も進んで検診を受けたほうが良い」、そして若い方からは「若い人もどんどん受診すべきである」と、検診に対する前向きな意見が得られた。今後は、今回行ったアンケート調査をまとめた啓発資料を各戸に配布して、受診率アップにつなげたいと思っている。

また、昭和５１年から町主催で行われている「裳掛地区健康づくり大会」には、当初から漁協婦人部として、他の女性団体と共に参画し、年毎に決められたテーマに沿って、魚料理を展示したり、試食してもらったりと、魚食普及と健康づくりを提案し、地域の人たち、若い世代の人たちとの交流を積極的に行っている。

そして、この「健康づくり大会」への参加がきっかけとなって、私たち女性の仕事である「かきむき作業」についても見直しを図ることができた。若い部員から、「ただ、がむしゃらに働くだけでなく、生活にメリハリをつけて生き生きと暮らしていきたい！」「子供達ともっと触れあう時間を作りたい！」等と作業時間を制限するなど、労働の軽減につながった。

さらに婦人部では健康づくりの一環として、「生命（いのち）の貯蓄体操」を組合所有の曙会館を利用して、３０歳代から７０歳代の人が実践している。この体操は、長時間、かきむきで痛めた肘やからだのコリをほぐす効果がある。私たち婦人部では「自分たちの体は自分で守ることを大切にしよう」と呼びかけている。こうした一連の活動により、健康に対する部員の気持ちが少しづつ変化してきたように思う。

（２）「婦人部だより」の発行

平成５年に第１回の「婦人部だより」を発行し、現在第１４号になっている。手づくりの広報紙だが、婦人部活動や部員の声、身近な情報やイベントの報告など載せて、活動がわかるように工夫している。

（３）「かき料理集」の発行と消費者からの声

かき生産の盛んな私たちの組合では、毎年１月末にかきまつりを開催して、かきの美味しさを消費者に広くＰＲしているが、婦人部でも部員や関係機関の方々の協力を得て、『か

き料理いろいろ』と題して、平成１０年１月、和洋中の料理を冊子にまとめた。そして、この料理集がきっかけとなって、「ラジオでかき料理を聴いたから、作り方をメモして送ります。」「邑久のかきが食べたいから是非送って欲しい。」などといった消費者からの声が直接届くようになった。

（４）部員名義の「私の貯金通帳」を作成

かきまつりやおさかなまつり等、婦人部員もいろいろなイベントや行事に参加する機会が増えた。これまでイベントの日当や研修旅費などは現金で手渡されていたが、思いきって漁協に部員一人一人の名義の口座を作り、その通帳にお金を振り込むようにした。１回の金額は大したものではないが、「私の通帳」という存在が活動の励みになっているようである。現在の部員全体の貯金合計は、約７００万円になっている。年２回のイベントには７０～８０名の部員が手伝ってくれ、イベント収益の一部をアムダ（アジア医師連絡協議会）や漁船海難遺児募金に寄付をしたり、備品の購入資金に充てたりしている。

５．波及効果

このような婦人部活動がきっかけとなって次のような成果、波及効果が得られた。

（１）健康づくり活動を通して地域の連帯感が向上

かき打ち従事者健康診断の受診率アップを図るために、啓発資料を作成したり、検診後のミニバザー開催など、健康に対する再認識を呼びかけた。生命の貯蓄体操は、漁家以外の人も参加し、地域ぐるみの実践活動に発展した。

また、かきまつりやおさかなまつり等のイベント行事には役員をはじめ、部員全体が意欲的に参加するようになった。さらに、家族、地域住民の協力も得られ、地域全体で盛り上げてくれるようになり、地域が活気づいてきた。

（２）部員同士の交流、世代間のコミュニケーションが活発化

イベント等の活動により、普段話す機会の少ない部員同士、また若い世代と高齢世代のコミュニケーションが増え、漁業技術や生活の知恵が伝承・見直される良い機会となった。

これからのリーダーである若い人の育成については、漁業技術や女性問題など様々な研修に積極的に参加するよう、婦人部長としてその部員の姑、夫に会って参加協力をお願いするようにしている。そうすると研修を受けた部員から「研修は大変良かった」、そして夫からも「良かったな。また研修に行って来いよ」と言われたと、うれしい感想を聞く。また、若い人を中心に健康や生活を考えた漁業、漁村の在り方について、話し合いがされるようになった。

６．今後の課題や計画と問題点

昨年、邑久町では町の女性組織、１６団体を連携させるために「さわやかネットワーク」を発足させ、漁協婦人部も参画している。これからの婦人部活動を考えるとき、漁業を同じ職業として活動している組織同志の交流と合わせて、それ以外の組織との交流の必要性を感じている。特にこれからを担ってくれる後継者には幅広い交流を持ってもらいたいと考えている。

さらに今後の婦人部の活動について次の３点を中心に取り組んでいきたいと思う。

（１）健康づくり活動の継続

健康づくりをテーマに活動してきた婦人部としては、この活動をさらに充実したものとして継続できたらと考えている。健康づくりを色々な角度から取り上げて、健康づくりに対する関心を高め、漁業者全員で取り組むよう推進していきたいと思う。

（２）私のためのお金づくり

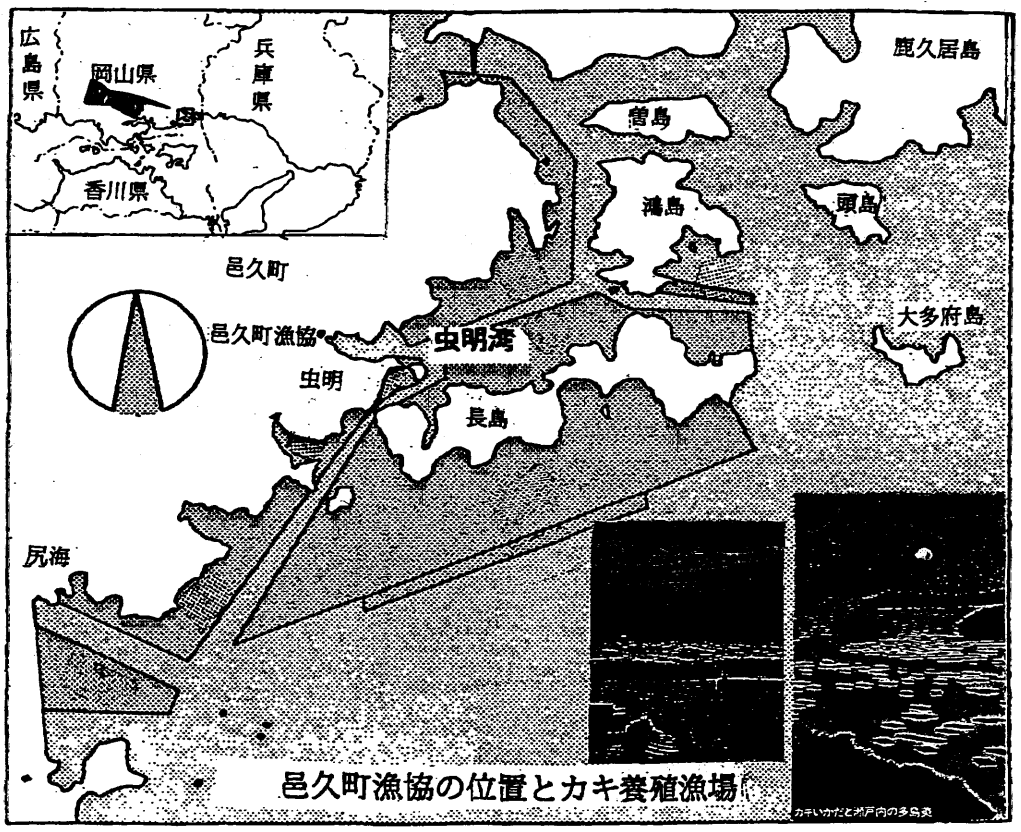
「私の通帳」はイベントなどの日当を入れるため作ったものだが、今後は５年後、１０年後が楽しめるよう、また自由な金額で貯金でき、自分のために自由に使えるお金として意味を持たしていきたいと婦人部で話し合っている。

（３）共同作業、相互扶助の推進

漁家にも高齢化の波が押し寄せている。ここ４、５年の間に女性も男性と共に海に出て、作業分担を行い、男性も女性も安心して作業に従事できるようになった。また、２～３軒のグループで共同作業することが増え、海での安全作業、事故防止につながったと評価されるようになった。

今年からは介護保険の問題があるが、住み慣れた地域だからこそできる相互扶助（助け合い、支え合う）は家族、親戚に劣らないくらい、大きな意味があると思う。寝たきりや独り暮らしの高齢者を定期的に訪問したり、声掛けをしたりとその役目を果たすのも婦人部の活動と考えている。

最後に私たち婦人部では安心して健康的に働く環境づくりと、これからの後継者の確保のために、明日につなげる活動を展開していきたいと思っている。



邑久町漁協の位置とカキ養殖漁場